

代悲白頭翁

劉希夷

洛陽城東桃李花

洛陽城東 桃李の花

飛來飛去落誰家

飛び来たり飛び去って誰が家にか落つ

洛陽女兒惜顔色

洛陽の女兒 顔色を惜しみ

行逢落花長歎息

行くゆく落花に逢って長く歎息す

今年花落顔色改

今年 花落ちて顔色改まり

明年花開復誰在

明年 花開いて復た誰か存在

已見松柏催為薪

已に見る 松柏の催かれて薪と為るを

更聞桑田變成海

更に聞く 桑田の変じて海と為るを

古人無復洛城東

古人 洛城の東に復る無く

今人還對落花風

今人 還た落花の風に対す

年年歲歲花相似

年年歲歲 花相似たり

歲歲年年人不同

歲歲年年 人同じからず

寄言全盛紅顔子

言を寄す 全盛の紅顔の子

應憐半死白頭翁

應に憐れむべし 半死の白頭翁

此翁白頭真可憐

此の翁 白頭 真に憐れむべし

伊昔紅顔美少年

伊れ昔は紅顔の美少年

公子王孫芳樹下

公子王孫 芳樹の下

清歌妙舞落花前

清歌妙舞す 落花の前

光祿池臺開錦繡

光祿の池台 錦繡を開き

將軍樓閣畫神仙

將軍の樓閣 神仙を画く

一朝臥病無相識

一朝 病いに臥して相識無く

三春行樂在誰邊

三春の行樂 誰が辺りに存在

宛轉蛾眉能幾時

宛転たる蛾眉 能く幾時ぞ

須臾鶴髮亂如絲

須臾にして鶴髮 乱れて糸の如し

但看古來歌舞地

但だ看る 古來歌舞の地

惟有黃昏鳥雀悲

惟だ黃昏 鳥雀の悲しむ有るのみ

洛陽のまちの東に咲く桃やスモモの花は、風の吹くままに飛び散り、この家に落ちてゆくのか。洛陽の乙女たちは自分たちの容貌のうつろいややすさを思い、町を歩いてこの落下に逢うと深いため息をつく。今年も花が落ちるとともに、人の容色もしだいに衰えてゆく。来年花開くころには誰がなお生きていることか。常緑を謳われる松や柏も長い歲月ののちには切り倒されて薪になるのを現に見たし、青々とした桑畑もいつしか海に変わってしまうことも聞いている。昔、この洛陽の東で落花を眺めた昔の人はもう二度と帰っては来ないし、今の人もまた花を咲き散らす風に向かっていく。年ごとに咲く花は同じだが、年ごとに花を見る人は変わってゆく。今を盛りの紅顔の若者たちよ、どうかこの半ば死にかけた白髪の老人を憐れと思っておくれ。なるほどこの老いぼれの白髪頭はまことに憐れむべきものだが、これでも昔は紅顔の美少年だったのだ。若いころには貴顕の子弟達と花かおる樹の下に遊び、散る花のまえではすずやかに歌い品よく舞いを楽しんだものだ。漢代の光禄大夫の築いた錦をくりひろげたような庭園や、樓閣に神仙の像を描いた大邸宅で、贅をつくした宴席にも列なつたものだ。しかしいったん病の床に臥してからは、もはや友人知己もなく、あの春の行楽はどこへ行ってしまったことやら。思えば眉うるわしい時期がどれほど続くといいのか。たちまちにして乱れた糸のような白髪頭になってしまふのだ。見よ、かつて歌舞を楽しんだ場所も、今はただ夕暮れ時に小鳥たちが悲しく囀っているばかりではないか。

今月は唐詩選に収録されている劉希夷の七言古詩です。青春のうつろいややすさ、人生の無常を流れるようなリズムに乗せて詠じた名作です。この詩には伝説が残されています。劉希夷がこの詩の一節「今年 花落ちて顔色改まり／明年 花開いて復た誰か存る」の一聯が出来たとき不吉な予感がし、さらに「年年歳歳 花相似たり／歳歳年年 人同じからず」の一聯を得てさらに不吉な胸騒ぎがしましたが、この二聯を捨てるにしのびずそのまま詩中に生かしました。ところが、その後一年もたらずに殺されたといわれます。

また別の伝説によると、劉希夷は同時期の詩人宋之問の娘婿で、この「年年歳歳」の句を見せたところ、宋之問は大変感心して、ぜひ自分に譲ってほしいと頼みます。しかし劉希夷が拒絶したため、宋之問は下僕に命じて劉希夷を殺してこの詩を奪ったといわれます。(唐才子伝)

この伝説はまさか事実とは思えません。宋之問の詩集には同じ詩が「有所思」という題で収録されているようです。ちなみに日本の「和漢朗詠集」巻下「無常」には「年年歳歳花あひ似たり歳歳年年人同じからず」の歌の作者を宋之問としています。いずれにしても「年年歳歳……」が古今の絶唱であるために伝説を生み、どのような理由からか宋之問の詩集にも入っているために、宋之問は不名誉な濡れ衣を被ったと思われる。ただ劉希夷が寿命を全うせずに非業の死をとげたという点は事実のようです。

全二十六句からなるこの詩は、内容的に四段からなり、一句から四句までの第一段で洛陽の春を美しく彩る花が風に散って飛ぶ風景からうたい起し、第二段の五句から十四句まで綿々と季節のうつろいの速さ、人の転変の激しさを綴ります。そして第三段(十五句から二十二句)で老人の若かりしころの豪遊を回顧し、それが病によってすべて失われたと述べます。最後の第四段(二十三句から二十六句)は若い娘の青春も永遠のものではありえないことを述べて無常観を強調して結びます。

詩人伝によると劉希夷は二十五歳ころ進士となり弁舌にたけ、容姿にもすぐれていたといわれます。しかし前述のとおり劉希夷は三十歳前に亡くなり、この詩に詠まれる白髪の翁になるまでの長生きはできませんでした。

この詩の題名の「代悲白頭翁」の代という意味は古い歌の作り代えの意味で、翁の気持ちに代わって詩を詠むという意味ではありません。しかし、読み下し文は日本での昔からの読み方に従って「白頭を悲しむ翁に代わって」ということになっています。また別のテキストでは楽府題にある「代白頭吟」と題しています。

参考文献：中国名詩選(岩波文庫)・唐詩鑑賞辞典(東京堂出版)・唐詩概説(岩波書店)

嶺外音書絶え 冬を経て復立春 郷に近づけば情更に怯なり 敢えて来人に問わず

嶺外音書絶 經冬復立春  
近郷情更怯 不敢問来人

《大意》嶺南に流されて便りも絶え、冬を経てまた春を迎えた。今ふるさとに近づくほどに胸が騒ぎ、往き逢う人に声をかけて尋ねてみる勇氣が出ない。

※清時代編纂された「唐詩三百首」には李頻詩となっているが、内容が詩人の実情に合わず、本号の漢詩を味わう「代悲白頭翁」同様に嶺南に流された宋之間の作とする説もある。

(李頻詩・渡漢江)

雪竹寒翠を垂れ 風梅晩春に落つ

雪竹垂寒翠 風梅落晩春  
雪竹垂寒翠 風梅落晩春

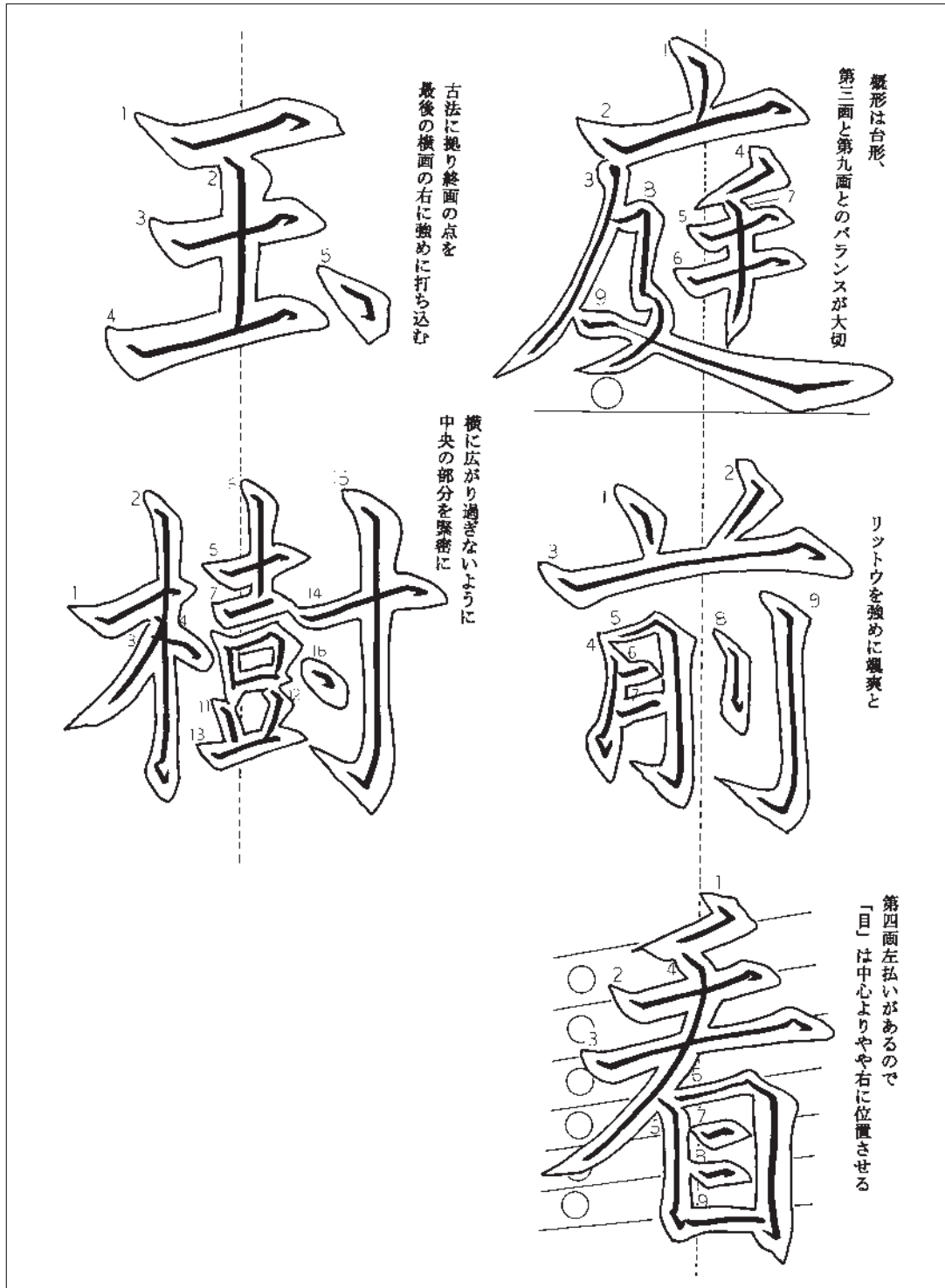
《大意》雪を帯びた竹は寒そうに翠色を見せて垂れさがり、風に吹かれる梅花は春の暮れに飛散する。

(林逋詩句)

読み  
庭前玉樹を見る(庭先の雪が被った玉のような樹を見る・李白)

庭前  
玉樹  
看

佐藤象雲書



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
  - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
  - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

庭前看  
玉樹

庭前看  
玉樹

次号課題

隸書

陽春布  
德澤

庭前看  
玉樹

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

細字部昇格試験課題実施要項

- ・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
- ・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
- ・〆切三月三日(木)・受験料三、〇〇〇円

音

キヨウイキクヨウ  
ガイカンキシヨウ

略解

謹んで父母が自分を養いし大恩を忘れてはならない  
大切な自分の体をむざむざ傷つけられようか



※今月の月例出品は中止となります

佐藤象雲書

支部	順位	氏名
<p>梅が香りにのちとりのあり</p>		
<p>山路かな</p>		

芭蕉

和泉溪石先生書



區區たる庸鄙

褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西曆六五三年) の臨書 (28)

象雲臨



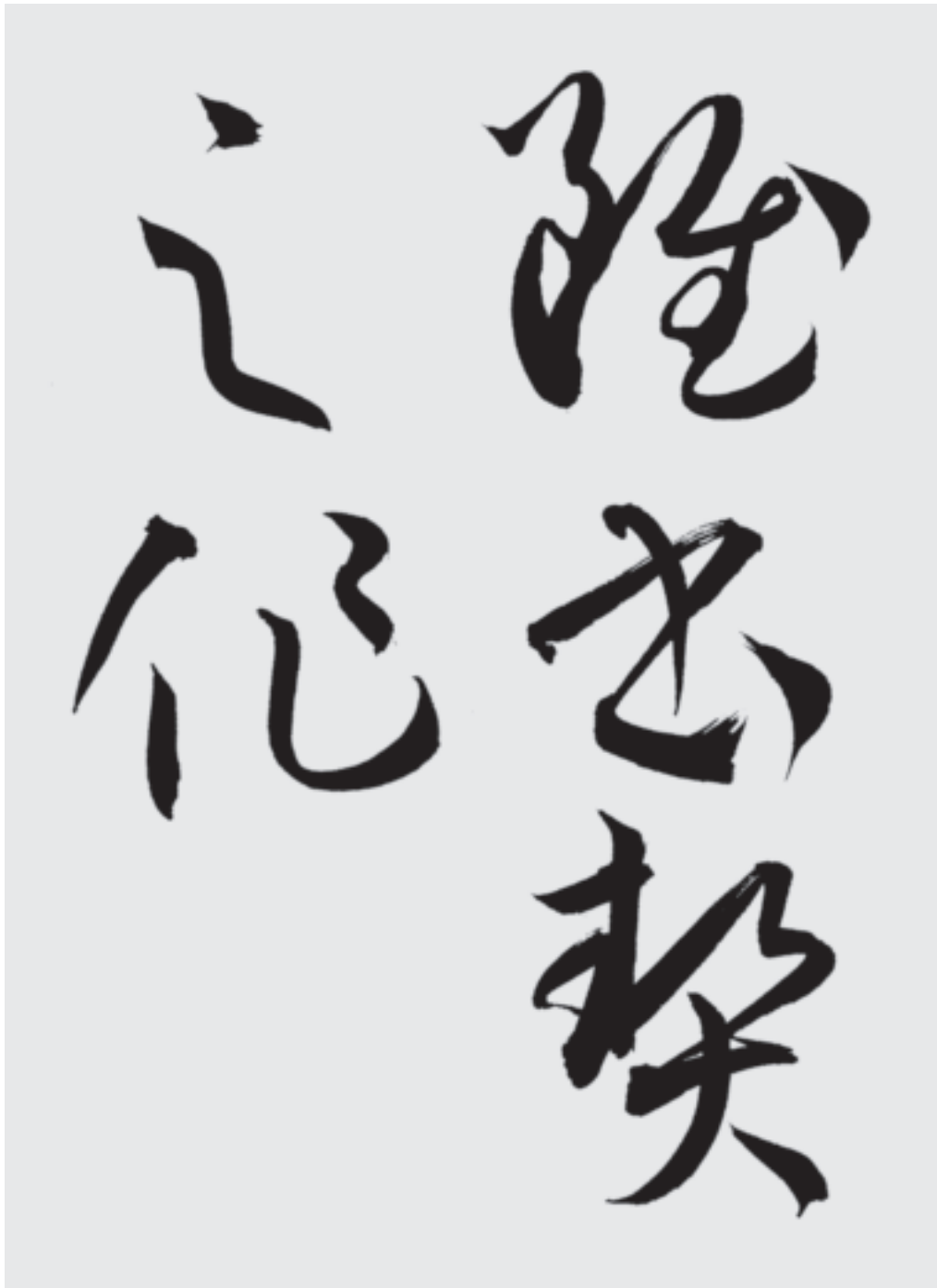
『區庸鄙』

「區」同体の筆法や同体の結構が二つ以上ある場合は、同姿別情法といって変化をつけることによって文字が単調になることを避けます。今月の「區」がその好例です。「品」は口が三つあり、まずこの三つの口に変化を持たせることが大切ですが、今回はさらに二つの「區」が続きますので一層その変化が難しくなります。褚遂良はこの難しい変化を自然に処理しています。始めの「區」は全体的に起筆を穏やかにして、優しい結体です。これに対して二番目の「區」は線の表情を変えるために起筆に変化を加えてきりつとした結体になっています。しかし、全体としての書風の統一感には保たれていて、文字の広がりや明るさを保つために、左上は大きく開け、また個々の口も窮屈感を持たせないように線を繋げずにアキを設けています。

「庸」上下中心が通り、横画の分間の変化も自然。

「鄙」偏と旁の高低差をきちんと持たせることが大切。偏は右側を揃えずに下部をどっしりと安定させています。





書契の作るや……と雖も

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書（10）

象雲臨

『雖書契之作』

今月は特に上三文字の線の変化と結体が美しく、結体上部を広く下部を小さめにという書譜の典型的な結体です。これは王羲之十七帖なども同じ傾向を持ちますが、孫過庭が王羲之書法を忠実に実践している表れだと思えます。よく書譜は王羲之の拓本などに残された書よりも王羲之らしいといわれますが、書譜が真跡肉筆で今日まで伝わっているためです。草書美の構成要素は、楷書や隸書など構築的な書体と違って変化の美です。変化というのは限りがありませんが、書譜は草書美の原理原則をその文章内容である書論とともに実際に書かれた文字として私たちに伝えてくれます。それは中心や重心の移動であったり、不当辺三角形や頭大下小などの結構法であったりしますが、大切なことは古典を漫然と観ずに、書法を探る心構えで臨書することです。なお「之作」は行末尾の二文字のため稍小さめに書かれています。書譜は書論の草稿で計画的にはなく臨機応変に書かれている結果です。これも一つ変化の妙といえます。